

国際ミツバチ研究協会



文献紹介

Apicultural Abstracts 45 巻 2 号 (1994)
 には、文献番号 372/94 から 713/91 までの 342 編が収録されており、日本からは 2 編の論文が掲載されている。

Apicultural Abstracts 45 巻 3 号 (1994)
 には、文献番号 714/94 から 1111/94 までの 398 編が収録されており、日本からは 16 編の論文が掲載されている。

Bee World 75 巻 3 号 (1994) には 3 編の論文が収録されている。Crane は「古代ローマ時代の養蜂」で、紀元前 200 年から紀元後 400 年の間に Varro, Virgil, Columella, Pliny, Aelian, Palladius の 6 人により記された養蜂の記録書をもとに、初期の養蜂では何世紀もの間、地上に直接巣を設置するという形が基盤となっていたと推測している。

また Hornitzky は、「養蜂産業におけるガンマ線の利用」で、医学用備品の殺菌に用いられているガンマ線が、アメリカ腐蛆病、ヨーロッパ腐蛆病、チョーク病などに侵された巣板の殺菌消毒に有効である点を指摘し、蜂児への影響についても述べている。

Bee World 75 巻 4 号 (1994) で、Freitas 北東ブラジルにおけるカシューナツの木と養蜂との関係について、カシューの木ミツバチ花粉媒介システムの発展のために、カシューナツ農家と養蜂家の養蜂家の協力の必要性を論じている。

「世界のハチ、ハチに関する郵便切手」では、Shaw and Ching がハチなどが印刷されている世界の 54 枚の切手を写真で紹介し、それらを含む多数の切手について発行国、発行年、絵の内容、価格などを 7 ページにわたる表にまと

めている。他 1 編。

Journal of Apicultural Research 33 巻 3 号 (1994) には 9 編の論文が収録されている。「ミツバチヘギタダニの生殖に対する寄生密度の影響」で、Eguaras らはダニの蜂児巣房での卵数が子孫にどのように影響するかを調査した。ダニの産卵数は冬には巣房あたり 6 匹、夏には巣房あたり 1 匹であり、また雄の発生率はそれぞれ 51.3%, 38.7% であった。これは冬期の蜂児の減少に伴う利用可能な巣房の減少により、1 個の巣房に多く産卵するということであり、巣房利用の競争は寄生密度の増加を引き起こす一つの要因であると述べている。

もう一つのダニに関する論文、「セイヨウミツバチとオオミツバチの働き蜂におけるミツバチトゲダニの長期生存」について、Rinderer らは蜂を小さなケージなどの不自然な状況に置いた場合、宿主への移動時に妨害になるらしくダニの生育期間を短くすることができるが、自然状態では長期生存が可能であると述べている。

Verma and Rana は「リングに訪花するトウヨウミツバチとセイヨウミツバチの行動比較」の続報で、すでに知られている 2 種のミツバチでは採餌飛行時間にずれがあることに加えて、1 匹のハチが 1 分あたりに訪れる花の数や 1 回の採餌飛行で訪れる花の総数、晴れた日と曇りの日の活動の違いなどについて調査した。その結果 1 分あたりの訪花数には違いがなく、また花の上面から花粉を採集する top worker は午前中、側面から花蜜を採集する side worker は午後集中している。両種は巣からより近い木を、同じ列の木よりも違う列の木を選ぶ。これはおそらく列間の傾斜を定位に利用しているからだろうと推測している。さらに果樹園のハチの集めてきた花粉は約 95% がリングのものであり、両種は同じ植物に忠実に採餌行動を行うとみられ、果樹園でのミツバチ利用のポリネーションが期待される。他 7 編。

(沼口康典)